

# 手紙を用いた防災教育の学びの伝播

○石原凌河<sup>1)</sup>・北村泉帆<sup>2)</sup>

- 1) 学会会員 龍谷大学政策学部、ryoga@policy.ryukoku.ac.jp
- 2) 非会員 株式会社 SIGEL、kitamura.i.0929@gmail.com

## 1. はじめに

全国各地において、地域の特徴を活かした多様な学校防災教育が広く展開されている。しかしながら、その多くは災害に関する知識・技能を「教える側」から「教えられる側」へと一方的に教え込んでいることが指摘されている（近藤・石原，2020）。矢守（2012）によると、一方向の災害情報は、専門家に過度に依存するとともに、住民の安全をパターンリスティックに過度にコントロールするという弊害を指摘している。このように、防災教育を学んだ児童・生徒が受動的な「教えられる側」に留まらず、学びを「伝える側」に立ち、防災教育での学びを主体的に周囲に発信する手法が求められる。

防災教育での学びを児童・生徒が周囲の人々へ発信する媒体として、「手紙」に着目した。その理由として、防災教育で学んだことを手紙に書き、それを大切な人に渡すことで、手紙の受け取り手も防災教育での学びの伝播が期待できるからである。また、手紙の受け取り手だけではなく、手紙を書いた児童に対しても、手紙の執筆を通して学んだ内容を深く振り返る機会となることから、防災教育で得た学びを手紙に記入し、それを大切な人へ送る取り組み自体が「対話的で深い学び」となることが期待できると考えられる。

本稿では、手紙を用いた防災教育の実践事例を報告するとともに、手紙による防災教育の伝播について考察することを目的とする。

## 2. 手紙を用いた防災教育授業の実践

筆者は、過去10年間に及んで徳島県阿南市教育委員会と連携を図り、阿南市内の小学校の出前授業に取り組んできた。本研究は阿南市の小学校の出前授業の取り組みの一環として実施した。対象校である阿南市立橘小学校は南海トラフ地震による被災が懸念され、最大で5mの津波が押し寄せることが想定されている。津波による直接的な被害が収束したとしても、長期的に湛水することが見込まれることから、高台にある橘小学校で長期的に避難所生活を送ることを余儀なくされることが地域の切実な課題であった。このような地域の実情を踏まえて、4年生の児童（全14名）を対象に「避難所」を題材とした70分の授業を展開することとした。授業は、2019年10月31日（火）13:15～14:25に実施した（図1）。

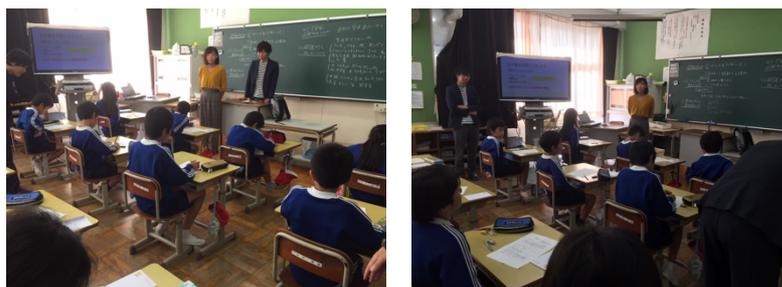


図1 防災教育授業の様子

## 3. 手紙を用いた防災教育の伝播効果の検証

### 3.1 手紙・アンケートの方法

授業終了後に手紙の記入方法と渡し方について説明した上で、一斉に手紙の記入に取り組んだ。手紙には「防災授業で学んだことなど、授業を通して大切な人に伝えたいこと」を記入してもらった。便箋は A5 サイズの白紙に罫線 12 行が引かれたものを使用した。手紙を封筒に封入する作業も全員で取り組んだ。手紙の記入後には、授業で学んだことに加えて、手紙の送り先とその理由を探るために「授業振り返りアンケート」を記入してもらった。また、手紙の受け取り手への伝播の有無を探るために、「手紙受け取り手アンケート」を実施した。手紙受け取り手アンケートは、封筒に手紙とともに同封しておき、手紙が渡った際にアンケートを記載してもらうようにした。児童を通じて学校に取りまとめってもらう方法と大学へ直接郵送してもらう方法を併用してアンケートの回収を行った。

### 3.2 手紙の記載内容の分析

児童が記載した手紙の内容を概観すると、大きく3つの内容に分類(表1)できた。第一に、「避難所への事前準備の必要性の理解」に関する内容である。14名全員の児童が記入していたことから、授業内容を概ね理解できていたことが手紙の内容からも伺える。第二に、「手紙の送り先への防災対策の促進」に関する内容であり、4名の児童が記入していた。授業を通して防災対策の必要性を理解し、大切な人に防災を推進してほしいという児童の率直な想いが手紙の内容から伺える。第三に、「災害時の児童自身の主体的な行動」に関する内容であり、7名の児童が記入していた。このことから、手紙の記入によって、災害時でも自らが主体的に行動し、大切な人を安心させようとする主体的な意志を助長することが示唆される。

表1 児童が記入した手紙の内容の記載例

分類項目	記載児童数	手紙の記載例(原文のまま)
避難所への事前準備の必要性の理解	14名	ぼうさいの事を勉強して、ひなんするときに、電池や、水や毛ふをもっていきます。ねこや犬をつれていくなつていかなければ、つれていきます。
手紙の送り先への防災対策の促進	4名	災害が起きたときのために、災害用持ち出しぶくろを用意しておこうと思います。 <u>だから、お母さんもじゅんびしておいてください。</u>
災害時での児童自身の主体的な行動	7名	もしぼく一人でひなんするときは、自分でひなんできるし、みんなぶじてほしいと思っています。

### 3.3 授業振り返りアンケートの分析

「授業振り返りアンケート」により、まず、手紙の送り先を尋ねると、両親を宛名にした児童は14名中10名と過半数を占めた。手紙を通して防災教育での学びを身近な両親へ伝えようとする意志が伺える。

次に、送り先を選んだ理由を尋ねたところ、6名の児童からは、「お世話になっている」、「宿題を手伝ってくれる」など、普段の日常の感謝の気持ちを理由に挙げていた。5名の児童は、「防災の話あまりしない」、「準備をしていない」、「津波の心配をしていない」など、防災の取り組み状況を理由に挙げていた。手紙の送り手の防災への関心度が低いことや、自宅で防災を取り組んでいない状況に対して児童が心配しているために、大切な人に向けて防災対策の推進を働きかけようとする意志が伺える。

### 3.4 手紙受け取り手アンケートの分析

「手紙受け取り手アンケート」を実施したところ、回答数は1件のみであったため、アンケートの回収方法については再検討する必要がある。アンケートの記入者は、ある児童の母親であった。この母親に対して手紙を記入した児童は、「ぼうさいなどのよいをあまりしていないし、持ち物もきまっていないから」という理由から母親に手紙を記入したとのことである。この児童が書いた手紙の内容を確認すると、「ちゃんと用意しないと遅れてしまう」、「お母さんも一緒にしてほしい」という旨の内容が記載されていた。その手紙を読んだ母親のアンケートの内容を確認すると、これからは自宅に防災バックを事前に用意する旨が記載されていたことから、手紙を通じて家庭での防災対策の実現に繋がったことが考えられ、児童が記入した手紙により防災の必要性を大切な人へ伝播した可能性が高いことが示唆される。

## 4. まとめ

本稿では、手紙を用いた防災授業の実践事例について報告するとともに、手紙の受け取り手と手紙を記入した児童への伝播について考察した。その結果、児童が防災教育で学んだことを「大切な人」に手紙を通じて伝えることで、受け取り手の防災対策の実現に繋がる可能性が高いことが示唆された。ただし、この点については、アンケートの回答数が1件だったことから、手紙の受け取り手への伝播に関しては引き続き精査していく必要があると考える。また、児童自身も防災教育で学んだことを大切な人に向けて手紙を記入することで、自らが主体的に防災に取り組もうとする意志や、家庭での防災対策の実践状況を案じ、家族を巻き込んで防災対策を推進しようとする意志が確認できた。今後は手紙を用いた防災教育の実践事例を積み重ね、手紙を用いた防災教育の意義について多面的に検証していきたい。

## 5. 参考・引用文献

- 1) 近藤誠司・石原凌河(2020):“360度の学びあい”を重視した持続的防災教育の検討、防災教育研究Vol.1, No.1, pp.67-79.
- 2) 矢守克也(2013): 巨大災害のリスクコミュニケーション 災害情報の新しいかたち、ミネルヴァ書房.